

動作に伴う浴衣圧の変化

共立女大家政 ○三野たまき 上田一夫

【目的】最も単純な和服である浴衣を用い、'和服圧'に影響を及ぼすヒトサイト'因子の影響を明らかにする。

【実験方法】被験者は20～30代の女子5名である。市販浴衣地を用い、被験者それぞれの寸法に合わせて浴衣を手縫いで作製した。通常用いているブラジャー・ショーツとすそよけを着用した被験者は、半幅帯と紐2本とを用いて自ら浴衣を着用(文庫結び)した。浴衣着用直後と一定負荷運動後の静立時、及び立礼・座礼や上肢上挙の運動時の圧を測定した。測定部位は、帯着用前のすそよけの紐(ほぼウエストライン上に固定)、腰紐、胸紐の3面、帯着用後の帯の上下端とその中間、腰紐、胸紐の5面の計8水平面と前後正中線を含めた12垂線との交点96部位と殿部を含めた膝部より上方の左右の脚14部位、肩峰点から腋下一付の12部位の合計122部位である。

【結果・考察】おはしよりの下端の着崩れは、立礼時には認められず座礼時に生じた。その部位は後正中線の付近に特異的に多かった。これは前傾動作によって生じる身体のW-Fの変化(特に腰部の上下方向の伸び)に、体を覆っている浴衣地(綿100%)が追従できず、布が足りない分だけ、紐が浴衣地上を上方にずれて補うために生ずる。これは腰紐の締め具合の如何に関わらず生じた。上体が元に戻ると、補った分の布が逆に緩み、着崩れとなったと思われる。また、座礼の動作に伴う浴衣圧の分布パターンの変化率を求めたところ、礼角度と浴衣圧の間に76%の部位で正、1%の部位で負の相関が認められ、23%の部位の圧は変わらなかった。礼の動作に伴って多くの部位の圧値が増加したにも関わらず、後正中や帯の下端の部位に負の相関や圧が変わらなかった部位が多かったことも、おはしよりのずれの生じる所以と思われる。